



民話ゆうき

お産山

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木明

民話を楽しくわいわい



東茂呂のはすれを小川が流れ、どてづたいにしばらく歩くと、人里はなれたところに林があります。おもに杉やひのきの大木がうっそうとして昼もうす暗く、中を通る一本道はほとんど人をよせつけませんでした。まれに山しごとや野良しごとを終えた人が村に帰る近道として利用するだけでした。

林をぬけると一本杉があり、そばの花が畑一面を白くして若者が仕事に区切りをつけた時には、陽はとっぴりとくれています。むらさき色にそまった西の空をあおいで若者はあわてました。

風でも気味わるい林道を通らなければなりません。若者はかさこそとなるおち葉の音や風が鳴らす木々のゆさぶりをうちけすように鼻歌はなうたをうたいながら道をいそぎました。

ちょうど林の半分ぐらい来た時です。ふと、だれかの声が聞こえたような気がして若者は立ちどまりました。耳をすますとたしかにふしぎな声が近づいてきます。

「オギャー、だいとくれ、オギャー、だいとくれ。」

赤ん坊の泣き声と、母親らしい女のだいてほしいというあわれなねがいのように聞こえます。

ふり返っても人の気はいもなくきみわるくなった若者は、走って家に帰りました。

それから何日かして、村人



たちの中にも

「オギャー、だいとくれ。」

という声を林の中で聞いたという者が何人も出てきて、うわさは村中にひろがりました。

若者は、おばあさんに話すと、「何かのたたりだ。」

といったが、いつの間にかゆれいが出るというので、この林に近づく者はひとりとしていなくなりました。

「いったいだれが、なぜ…。」

若者はもう一度その林に行ってみることにしました。

林道の中ほどまで行くと、やはりこの前と同じように、「

「オギャー、だいとくれ。」

という声が聞こえてきます。今度こそその声をつきとめようと、声のする方に歩いて行くと、ここまで行っても追いつけません。

林もつきるころ目の

前が急に明るくなり、
若く美しいむすめが、

かみをふりみだして立って

いるではありませんか。

白しようそくにわらじばきの

すがたは、どうみてもこの世の人

ではなさそうです。とつせんのこと

におどろいてにげ帰る若者の背に

またしても、

「オギャー、だいとくれ。」という

声が追いかけて来ます。

家に帰った若者は、その日のこと

をおじいさんに話しました。すると

おじいさんは、こんな話をしてくれ

ました。

「むかし、この村に赤んぼうをだ

いた若いむすめがやってきた。そりゃ

あ美人でな。だがまずしい身なりを

した※こじきじゃったよ。わたしはい

いが、赤んぼうに何かめぐんでほし

いと泣いていたっけ。だけどな、そ



のころはこの村もまずしい者ばかりで、
はらをすかして泣く赤んぼうにさえ何
もあげられなかったわい、みんなよっ
てたかって娘を追いかえしてしまっ
た。」

その後のむすめのこととはだれに聞いて
も知る人はありませんでした。しか
し、若者は思いました。その赤子をだ
いた娘が林の中ほどで倒れ、あの時何
もしてあげなかった村人たちをうらん
でいるにちがいないと。

若者は、さっそく村人たちを集めて
の話をしました。みんなで相談して、
くようをすることにしました。一本杉
の下に小さなつかをつくり、黒みかげ

石に「童子大姉の墓」ときざん
で立て朝な夕なに線こう、花を
たむけるようにしました。

それからというもの、

「オギャー、だいとくれ。」

という声は聞こえなくなり、娘を見
ることもなくなりました。林はいつし
かだれいうともなく「お産山」とよば
れるようになり、村人はここにお参り
すると、お産がかかるくてすむといっ
て行くようになりました。



おしまい

※こじき 現在は差別用語（放送問題用語）とされたため使用
することはできなくなり、別の言葉に言い換えられることが多い。

（ウィキペディアより引用）